

## 石刃―先土器時代研究における用語概念の二・三の問題―

山 中 一 郎

石器時代の研究において、石刃と呼ばれる遺物は大きな意味を持っている。石刃という用語は多くの研究者にとって形態定義に基づく剥片の一部を指すにすぎない。しかしそれ以上の意味を不可分的につけ加えて石刃を取り扱う研究者も存在する。さらに石刃はそれが製作された時に採用された技術と結びつけて議論される時、形態定義を離れた議論となる。すなわち「石刃技法」とも呼ばれる剥片剥離技術が定義され、それに基づいた生産物が石刃であると考えられる研究者が出現するのである。

本稿においては日本先土器時代研究における用語のあり方に簡単ではあるが研究史的に触れ、概括し、石刃の用語概念の問題を整理しておきたい。

### 一 研究史にみる用語概念の変化例

日本先土器時代の研究は民族的で人類学的な単位を議論してきたとはいえないであろう（Leroi-Gourhan 1964, pp. 200-202, ルロ

ワールグーラン（荒木訳）一九七三、一四八―一四九頁参照）。初期の研究段階に設定された「石器文化」という概念の詳細な検討を試みる必要があるが、例えば「国府石器文化」という捉え方は、「国府石器群」と呼ばれるが、別に「国府期」という表現と同義的に用いられる（堅田直監修一九八一参照）。そこで「石器文化」という概念は編年学的単位を意味するものとして用いられる。一つの「石器文化」にまとめられるものは共時的存在であるという仮説が受けいれられてきたことになる。

「国府石器文化」の認定条件は、国府型ナイフ形石器と定義される一定の形態をもつ石器を原材から製作する一つの石器製作技術の存在であるが、この「石器文化」が民族的で人類学的単位での議論の対象に至りえなかったのは、少なくとも、その編年学的位置づけが、「国府期」という表現の是非はさておいて、仮説の域を出なかつたからである。

すなわち、「瀬戸内技法」という石器製作技術の定義に従って、その技法の確認に基づいてその存在を認めることになった「国府石器文

「化」は、そのまま編年学的地位を与えられることになったのであり、こうした考え方をとることは、「国府石器文化」という用語を民族的で人類学的単位で考えようとする方向から離脱させるに至ったと思われる。この方法では「国府石器文化」の空間的分布は追求することができるとしても、時間的分布は仮説的にあらかじめ決定されてしまっただからである。

「国府石器文化」に限らず、「東山石器文化」、「杉久保石器文化」、「茂呂石器文化」、「岩宿石器文化」といった捉え方も、本来ならば民族的で人類学的単位として、その編年学的位置づけと分布が明らかにされる場合には活用される予定であつたのであろう。しかしそれらの「石器文化」は人そのものではなく、物を製作するつくり方でしかないことは定義からして当然である。一方、われわれの前にある資料が確実に示すものは技術でしかないという制限があり、技術的革新性によつて時期を画する対象から人の内面的なものを求めることが難しいのも当然のことであらう。

そこでわれわれの研究史は必然的に人類学的単位での歴史の追求から外れて、むしろ人によつて用いられた技術の多様性の反映と思われるものを探そうという方向にむかつたと考えられる。「石器文化」という用語の他に、「石器群」という用語が同じように使われることはそれを示していよう。この傾向は三〇年余りの短かい研究史とはいえ日本先土器時代研究における先学諸氏の取り組みの正当性を見ること

ができる点であり、われわれもその延長線上で研究を続けているのである。

「石器文化」の概念を研究上有効に作用させうるには多くの障害が存在した。最大のもは編年学的問題であつた。<sup>1)</sup>C年代数値と層位的出土例を併せ検討することによつて、日本先土器時代の編年を確立するための研究を積み重ねてこられたのは芹沢長介教授であるが（芹沢一九六七）、当時の研究段階ではそのための資料は少なく、とくに層位的出土例の反覆性は極めて乏しかった。いまさらモンテリウスを引くまでもなく、対象資料の反覆例の増加はそれに基づく仮説の蓋然性を高くする（モンテリウス〔浜田訳〕一九三二、二九一三〇頁）。しながら、芹沢教授の研究方向は、その反覆例の増加を多く見るに至らず、例えば瀬戸内地方では、当初採用された層位的出土例の再検討すら要請されるに至つた。解釈が矛盾する層位的出土例が一例でも検出された時には、編年体系仮説は崩壊する。西ヨーロッパのムスチエ文化研究におけるムスチエ遺跡の調査はその好例である。

日本先土器時代研究史において、編年確立作業が新しい観点から進められるのは、一般的に「月見野・野川以後」と呼ばれる時期からである。とくに小田静夫によつて積極的に進められる新しい研究では、武蔵野地方における諸遺跡を深く掘り下げ、重複する文化層を一枚一枚検出する方法が採用された。文化層認定の基準は、火山灰層を基層とする堆積物の性質に帰因する困難性を残しているが（ヴィラ〔山中

訳」一九八一参照)、おおまかにいえば対象資料の反覆性はかなり高くなったといえよう(赤沢、小田、山中一九八〇)。またこの時期には、<sup>14</sup>C法の年代数値の増加の他に、黒曜石のフィッシュョン・トラック法の援用、さらには火山灰年代学の発達を見るに及んで、こと武蔵野地方に関しては編年体系はかなり整備されたといえる。

編年学的成果の裏づけがあれば「石器文化」の概念は有効に作用するはずであった。それは日本全国を駆けめぐるはずであった。しかし現実はその至らなかった。それ以前の二〇年余りの日本先土器時研究の蓄積がそれを不可能にしていたのである。

こうした調査例が南関東地方に局限されていて、その他の地方の研究成果に対応させる方向が消極的に対拠されてきたことに大きな原因があるが、剥片剥離技術に関してのみといえるとしても、石器群の分析を目指す研究が多くの研究者に支持されつつあったことにもよる。これは、編年確立作業はさておき、石器の技術学的研究を実証的に進めてきた松沢亜生が主張した研究方向が、接合資料例の増加を伴って広くうけいれられたことに要因があったともいえる。

さらにはモヴィウスらの研究(Movius, David, Bricker, Clay 1968)に刺激をうけて属性分析による研究が進められてきたことにもよる(加藤、畑、鶴丸一九七〇)。その目的は異なるが、この方向の研究例は、萩原博文や竹岡俊樹さらには松藤和人を中心とする旧石器文化談話会に属する研究者の業績に顕著に認められる。われわれの

主張する技術形態学的研究もこの流れの中に位置づけられる。

## 二 日本先土器時代研究の現状

日本先土器時代研究の現状の特色を要約しよう。

汎日本的な編年確立の作業は地域差を論ずるための比較概念が明確にされないために困難を極めている。従って民族的で人類学的単位として西ヨーロッパで独歩した概念用語に似た「石器文化」という語は適用できなくなったといえようか。しかしこのことは、資料の限度を考慮すれば正当な選択であることはすでに述べた。

地域別の編年確立作業をみると、例えば山形県のように長い年月にわたる努力を認めることができる。一連の加藤稔の仕事である。また北海道を例にとれば、吉崎昌一の試行錯誤的ではあるが系統的な仕事をあげることができるといえる。ただ後者はその進展を見なくなって久しい。瀬戸内地方、北西九州では良好な層位的出土を示す遺跡の発見が極めて困難であることが判明しつつある。南関東地方を除いた、重複文化層を検出しない地域では、編年確立作業そのものが難行している。

しかし最近瀬戸内地方では、層位的出土例を検出する望みがほとんどないことから、属性分析による遺物の検討をもとに編年体系が求められるという研究がなされた(竹岡一九八〇a)。この方向性が有効であることは松藤和人によっても確認されている(サケット松藤訳)

一九八一、五八頁)。しかし層位学的編年は編年学の基礎であり、小林達雄の言うように層位学は型式学と不可分であるのは確かであるとしても(小林一九七五、一一五—一六頁)、層位学的事実は型式学的序列に優先する。

ただ念頭においておく必要があるのは、たとえ属性分析法は編年体系を確立するために有効であるにせよ、編年体系が確立した地域における石器群の比較作業、すなわち人類学的解釈をなすのにより力を発揮するであろうことである。属性分析法という武器は、そうした威力をもつからこそ、その援用によって編年体系が確立した地域においても「石器文化」が民族的で人類学的単位として独歩することをなさしめないであろう。分析結果によって与えられる性質が「石器文化」と不可分のものとなり、属性の認識が確実なために技術学的属性分析を行う傾向が強くなればなる程、「石器文化」は技術体系の認定により近くなるからである。資料操作の方法は資料の性質に左右されるがそれによってなされる議論の性質をも左右する。資料操作の方法を石器遺物の性質のために厳しく限定すると議論の結論は技術論に限られてくる。「それは目的でない」とか「目的のない型式学」という批判が生じる点である。

われわれの考えでは現在においては石器遺物の研究は技術形態学に徹すべきである。機能形態学は技術形態学と混同してはならず、前者の確立に後者の援用が必要であるが、そのためにはつなぎの理論が

必要であると考え(山中一九七八、一九八〇)。この両者の用語を概念的に区別して用いようとする傾向は竹岡俊樹の仕事に見られるが、機能形態学的用語には技術形態学的用語が $\wedge$ で囲んで用いられている。石刃と $\wedge$ 石刃 $\vee$ という使い方がされる。最も理解に注意を要する点はその両者が概念的に全く異っていることである。そして混乱を引き起すものになるのは $\wedge$ 石刃 $\vee$ を認定する方法がないことである<sup>(1)</sup>。しかし技術と機能を考えることは石器研究の基本的な観点であるという一般認識にあって、両者を概念的に区別する考えが見られ始めたことは日本先土器時代研究の現状の中でも特記に価すると思われる。

技術学的研究は剥片剥離過程の工作復原の面において盛んに行なわれている。石器資料の接合作業が意欲的になされている。ポルドが指摘した接合作業のもつ二つの側面に対しての研究が進められている(Bordes 1980, p. 132)。遺物分布の共時性に関してはなお問題を残し、とくに堆積物の性質に難点があるので、ポルドやヴィラの指摘を考慮しなければなるまい(ヴィラ(山中訳)一九八一、六一—一頁)。しかし技術学的研究の面ではポルドやテキシエのやや消極的な評価もあるが(Tixier, Inizan, Roche, 1980, pp. 26—27)、石の割れ方の理解に対する絶対的武器となる。そうした資料が増加しているのが現状である。

接合資料の分析は、石材の消費に関する詳細かつ実証的検討を可能にする。さらに石器製作人の製作意図と石材の性質を考慮した石器製

作態度の理解を可能にする<sup>(2)</sup>。こうした石材消費の経済学を求める方向が、発掘土を篩にかける発掘方法の採用を伴って試みられつつある。

接合作業を伴う石器製作技術の研究、および属性分析法の採用は石器観察を細かいものにした。その議論は技術体系に関するものに限られるとしても、目的をもたないものでは決してない。石器群比較にあって基礎的な資料を提供するのみならず、資料の限界の中で過去の人の生活復原に寄与する展望を開きつつあると思われる。この面での研究の中で研究成果として取り上げるべきものの一つに、柳田俊雄、藤原妃敏による「瀬戸内技法と石刃技法―調整技術のもつ意味―」と題する論文をあげることができる。

さてかかる三〇年余りの日本先土器時代研究の歴史を概観する時、その方法論的進展は必然的な道を歩んできたと評価できる。西ヨーロッパの研究史が歩んだ長い道のりに比べて「無駄」を見事に省いたといえようか。しかし逆説的にみるならば、西ヨーロッパにおける「無駄」は実は無駄ではなく、必然的無駄ともいうべきもので、それは西ヨーロッパの研究の思想的生産物に一種の強みを与えている。それらうちの最大のもの、先史時代人の生活を復原する目的の原位置論的具体的研究法を確立したことであり(Leroi-Gouhan, Brezillon 1972)、また従来の研究史の過程で用いられた用語の整理検討なくしては、新しく型式学的研究を進めることができないという結論に達

したことである(Brezillon 1968)。

「無駄」を省いたかに思えるわが国の研究では、逆にそうした概念用語での不徹底性が認められつつも、用語の整理検討を要求する声が非常に乏しい。例えば分類基準が技術と形態であることで同じであるのに、分類結果をある時は器種という概念で呼び、ある時には形態という概念を与える。型式、形態、器種という用語が石器研究の概念用語である限りは、各々の概念で把握できる実際の遺物の分類基準の性質が異ならねばならない。分類基準の性質が同じである以上は、主型式、亜型式といった把握が適当であろう。

議論の目的に従って用いられる概念が異なるためにその概念用語が異なることは理解できる。しかしその概念用語を設定するためには、対象資料の操作法は固有の体系をもたねばなるまい。あるいは少なくとも他の体系をとるとしてもその有効性を説明する「つなぎ理論」なるものを提示しなければならないだろう。型式、形態、器種という概念で石器遺物を把握すれば目的とする議論が成立することは理解できる。しかしその三つの概念で石器遺物を捉える必然性を説明できるだろうか。分類基準の性質が同じであるなら、形態差、器種差、型式差と捉えるに際しての異なり方を明確に示すことは難しい。また分類基準を技術におく時、分類結果から機能を論じることは不可能である。かつて杉原荘介教授は形態と型式の概念を示されたが(杉原一九四三)、今日のこの概念用語はもはや杉原教授の唱えられた意味での使用の域

にはとどまっていない。

日本先土器時代研究の現状においては、概念用語の整理が必要であろう。杉原教授の示された方向に沿って、型式学的研究と形態学的研究の二側面を相互に進めていくことが求められるという（白石一九八〇）。しかしこの二者は目的こそ異なるが、実質的な遺物操作の基準の性質では異ならないではないかというのがわれわれの疑問である。すなわち両者は方法論の差ではなく解釈の差なのである。資料操作の用語概念に解釈の概念をもちこむことによって混乱をひきおこしている。あるいは議論の結果の必然性を弱くしているといえよう。この質的な混乱は石刃という用語に関して概観すると明きらかである。

### 三 石刃の概念

日本における石刃の定義は一九六五年大井晴男によって整理された（大井一九六五）。『石刃技法』とは、連続的に多数の同形の剥片—石刃—を剥離することを目的とするものであり、石核の一端または相対する両端に打撃面を限り、その周縁に連続的に一定方向からの打撃を加えて剥片を作ってゆく手法である。また石刃とは、前述の石刃技法によって作られる剥片で、結果として一般に1ないし数条の稜を有し、かつほぼ平行する2側縁を持つ縦に長い形をとる。』（同書、四頁）。大井は技術史的観点から定形的な石器を作るのに好適な一定の

形を呈する剥片を連続的に剥離する技法を「石刃技法」の意義であると評価した。<sup>(3)</sup>この立場からは、鎌木義昌教授の定義した瀬戸内技法も同じ意義をもつことは大井の述べる通りである。

さて大井の石刃の定義が「石刃技法」と一体となっているのは、技術的観点を強調するためでもあるが、それ以前に示された渡辺仁、杉原莊介、芹沢長介らの定義が示した概念でもあるからのようである。石刃を石刃技法による生産物と規定する考え方はその後一貫して存在する。そして石器資料を手にした時に呼ぶべき名称としての石刃（ポルドの定義）の規定はあいまいにそのまま「石刃技法」の定義が議論される。

例えば小野昭は大井の「石刃技法」の概念をさらに拡大して「横剥石刃技法」という捉え方を提言する（小野一九六九、四五頁）。橋本正もこの流れの中に「石刃技法」を理解しているとみることができ（橋本一九七五a、b）。しかし小野も橋本も「石刃技法」と呼ぶ剥片剥離技術の解釈について議論をするが、どのような定義をもって「石刃技法」を規定するのかという点は明きらかでない。

剥片剥離技術として、ともかく「石刃技法」の定義を示すのは竹岡俊樹である（竹岡一九七九）。『時期、地域をこえて、普遍的に認められる剥片剥離技法の1つ。剥離は、打面の縁辺の角および剥片剥離作業面における稜をとる形で進み、その剥離は同時に新たな角・稜の形成を意味する。従って、角・稜の剥離⇓角・稜の形成⇓角・稜の剥

離二角・稜の形成という連鎖によって剥離は進行してゆく。この剥離進行形態をもつ剥片剥離技法』。

しかしこの定義によれば、先行剥離面に全く重複する剥離面で剥離される場合を除いて全ての技術が含まれないだろうか。一般的な剥片剥離の進行形態が表現されているだけのようである。竹岡は、竹岡が「石刃技法」と呼ぶ剥片剥離技術を想定しても、手にとる石器資料を「石刃技法」の生産物とは判断しない(竹岡一九八〇c)。彼にとつて、分析を経ない時点では石器資料に名称はあえてなく、従って他の研究者の呼ぶままであり、分析を経た後も「石刃」と呼ぶ必要もない。こうした立場にあつて「石刃技法」という用語が使われることが混乱を生じさせる。

われわれの立場にあつては「石刃技法」の定義はない。この点は竹岡に誤解がある(竹岡一九八〇b、六六一六七頁)。資料の分析を経て剥片剥離技術の復原がなされた後に、その技術にあてられる用語の一つである。もちろんその分析作業の資料体は、一つの石器群に属する全ての石器遺物である。われわれが石刃と定義して分類する石器遺物のみが対象資料になるのではなく、それはその量によって分析者の経験に基づく目安を与える役割を果たすのみである。

「石刃技法」にあたるフランス語の用語はない。この用語は Blade technique という英語の訳語であろう。橋本正は英語のまま使用している(橋本一九七五a、二七―二八頁)。しかし英語の文献に

おいても Blade technique なる語はなかなか出てこない。大英博物館の有名なガイドブックである“Flint Implements”(第三版)にはタイトルとして用いられているが(同書六一頁)、『例えばホルダスの“Tools of the Old and New Stone Age”(1970)』には、石刃剥離の技術的説明はかなり詳細に述べられているにもかかわらず、Blade technique なる語はない。筆者はかつて概説書中に、一般的に呼ばれる言葉として「石刃技法」という表現を用いたが(山中一九七五、九一頁)、その時引いたブレイドウッドが用いた原語は Blade-tool technique であつた(Braidwood 1967, p. 60)。また最近松藤和人がサケットの論文を訳出したが、そこで松藤が「石刃技法」という用語をあてた原語は Blade technologies である(サケット〔松藤訳〕一九八一、四一頁、Sackett 1968, p. 62)。ホルダスの述べるように、石刃を剥離する技術はその典型が描写されるが技術的専門用語として定義を伴う「石刃技法」は存在しないのではなからうか。

ホルドの定義に従い石刃をその長さが幅の二倍以上ある剥片とし、細石刃をもそのカテゴリーに含めるとすると、<sup>(4)</sup>そうした石器遺物を効率よく剥離する技術がいくつか知られる。先に触れたように、石器群の中における石刃の量の多さがそうした技術の存在を想定させるが、その技術の復原は厳密にいえば接合作業による。とはいえ石核と石刃および関連資料の技術的研究によって充分なされる。とくに石核の

検討は大切である。

ティキシエらによれば、石刃剥離はハンマー打撃による場合と押圧打撃による場合があるという。ハンマー打撃による石刃剥離に用いられる石核は、単打面（円錐形石核）と複打面（円筒形石核、角柱形石核）の場合があり、後者には両設打面と直交打面がみられる。打面の種類には原面打面、剥離面打面、多面調整打面のいずれもある。多面調整打面の場合、数回の石刃剥離のために一度打面が調整されるものと、ただ一回の石刃剥離のために打面縁部が突出するように調整されるものとを区別できる。後者の場合に産出される石刃には、蹴爪形打面（Tixier, Inizan, Roche 1980, p. 105, fig. 47, no. 7）が認められる。

押圧打撃による石刃剥離は、剥離される石刃の稜数および稜の位置を想定しつつ打点を打面上に求める行為にあって最も正確を期すことが可能である。しかしウツトルパセの事故をしばしば生ぜしめる打撃法であるので、用いられる石核には、同時的に上下両端の打面を用いるという意味での両設打面をもつものがないという。従って石核は単打面の円錐形石核と、平板形石核が普通である。しかし一打面からの剥離が不可能になって後に別の打面が作出されたという場合に複打面の例がみられ、その場合は表裏両側に剥離作業面をもつ例を含めて平板形石核になる。打面の種類には、ハンマー打撃による場合と同じく、原面打面、剥離面打面、多面調整打面のいずれもある。ガラス

質の石材では押圧具のすべりを防ぐために、打面につや消しが施されるものが多く（Tixier, Inizan, Roche 1980, pp. 55-59）。

こうしたティキシエらの石刃剥離の理解は、あくまでも技術的事実に基づいている。日本におけるそうした傾向の研究は系統的には存在しなかった。われわれが先に技術学的研究の到達した成果と評価を与えた柳田・藤原論文は、資料が増加した今日において、石刃剥離に技術学的照明をあてたものである（柳田・藤原一九八一）。

柳田・藤原は定義概念が、あいまいであった従来の「瀬戸内技法」および「石刃技法」を技術学的概念に限定して論を展開した。すなわち瀬戸内技法の定義を松藤和人のいう第2工程に限定して議論することは剥片剥離技術を技術論的に論ずることを意味する。一方瀬戸内技法に對置的に比較されたのは「縦長の企画剥片の連続剥離技術」と定義される「石刃技法」である。大井晴男がすでに指摘したように（大井一九六五、九頁）、技術学的観点からは両者は明きらかに異なっている。柳田・藤原のように議論の前提を明確にする時、その結論である「瀬戸内技法と石刃技法は、技術的な観点から異なる部分が大い。」という指摘は、実は古くから知られていたことである。同論文はその違いを実証的にかつ詳細に説明したことになる。

問題は柳田・藤原論文の結論の後半にある。「瀬戸内技法と石刃技法を同一の用語で呼んだり、石刃技法から瀬戸内技法が発生するといった考え方は、技術の関連性という視点に限定すれば、妥当ではない」

とある。技術論的にいえばその通りで異論はない。大井論文以来の「石刃技法」に関する議論はその生産物の形態の企画性の意味が併せ論じられた点に特徴がある。テキシエらが指摘したように、石材の性質を見事に把握した技法である瀬戸内技法は、その生産物のみかけの形態では石刃ときほどかわらないものを生み出している (Tixier, Inizan, Roche 1980, p. 27, 柳田、藤原一九八一、三九頁)。この現象の解釈において瀬戸内技法と同一の用語で呼ぶことが生じるのである。

これは資料操作の手段にしかすぎない型式学の用語に、仮説的にしか付加しえない解釈概念が含まれることに議論の混乱の原因があることを示していないだろうか。われわれはその点を日本先土器時代研究が克服しなければならぬ重要な点と認識する。

### 註

(1) 石刃および「石刃技法」の定義に関しては、竹岡とわれわれの間に議論の交換がある (竹岡一九八〇b、山中一九八〇)。用語体系の違いに関する誤解がお互いに存在するが参照されたい。

(2) 越中山遺跡K地点、および平林遺跡出土資料を接合作業を通して研究されている東北大学研究生会田容弘氏の御教示に多くを負っている。記して感謝申し上げる。

(3) 大井は後期旧石器時代に盛行した「石刃石器群」の技術基盤として「石刃

技法」を評価する。しかし石刃を系統的に量的に生産する技術が技術史的に高い水準に位置づけられることを概念でなく実証として示したのはルロアール・グーランである (Leroi-Gourhan 1964, pp. 190-197, ルロワールグーラン (荒木訳) 一九七三、一四一-一四五頁)。ブレイドウッド、ボルトラスもこの実証を引用している (Brinkwood 1967, p. 60, Bordaz 1970, p. 57)。

(4) 細石刃と石刃の区別を行うのは便宜的である。幅によって基準を設けるが (赤沢、小田、山中一九八〇、七四-七五)、それは日本先土器時代の資料の分析が進めば変わりうる (Tixier, Inizan, Roche, 1980, p. 59 参照)。

### 引用文献

- 赤沢威、小田静夫、山中一郎 (一九八〇) 『日本の旧石器』、東京。  
ヴィラ・P (山中一郎訳) (一九八一) 『ヨーロッパおよび西アジアにおける前期旧石器時代の生活面』、『旧石器考古学』23、一  
二七頁。  
大井晴男 (一九六五) 『日本の石刃石器群 “Blade Industry” に ついて』、『物質文化』No. 5、一一-一三頁。  
小野 昭 (一九六九) 『ナイフ形石器の地域性とその評価』、『考古学  
研究』62、二二-四五頁。

堅田 直〔監修〕(一九八一)『シンポジウム 二上山旧石器遺跡をめぐる諸問題』、奈良。

加藤晋平、畑宏明、鶴丸俊明(一九七〇)「エンド・スクレイパーについて―北海道常呂郡端野町吉田遺跡の例―」、『考古学雑誌』第五五卷第三号、四四―七四頁。

小林達雄(一九七五)「層位論」、麻生優、加藤晋平、藤本強(編)『日本の旧石器文化―総論編』所収、東京、一一四―一三六頁。

サケット・ジェームス・R〔松藤和人訳〕(一九八一)「西南フランスにおける上部旧石器考古学の理論と方法」、『旧石器考古学』23、四一―五八頁。

SACKETT, James R. (1968): "Method and Theory of Upper Paleolithic Archeology in Southwestern France", in Sally R. BINFORD and Lewis R. BINFORD (eds) "New Perspectives in Archeology", Chicago, pp. 61-83.

白石浩之(一九八〇)「学史からみたナイフ形石器の分類とその方向性」、藤井祐介君を偲ぶ会編『藤井祐介君追悼記念考古学論叢』所収、吹田、七九―九六頁。

杉原莊介(一九四三)『原史学序論』、諏訪。

芹沢長介(一九六七)「日本における旧石器の層位的出土例と1960年代」、『東北大学日本文化研究所研究報告』第三集、五九―一〇九頁。

竹岡俊樹(一九七九)「蓮光寺山第一地点における石刃技法の分析」、『考古学基礎論』1、一一―四七頁。

竹岡俊樹(一九八〇a)「瀬戸内海地方における石器群の変遷―瀬戸内技法複合の遺物の大きさに関する分析」、『旧石器考古学』21、一四三―一八七頁。

竹岡俊樹(一九八〇b)「香川県朱雀台第一地点における石刃技法の分析」、『考古学研究』104、七六―一〇〇頁。

竹岡俊樹(一九八〇c)「石器研究の方法とその見通し」、『考古学基礎論』2、五三―七〇頁。

TIXIER Jacques, INIZAN Marie - Louise, ROCHE Hélène (1980): "Préhistoire de la pierre taillée I terminologie et technologie", Valbonne.

橋本 正(一九七五a)「富山県における先土器時代石器群の概要と問題」、『物質文化』No. 24、一五―二九頁。

橋本 正(一九七五b)「石器の機能と技術」、麻生優、加藤晋平、藤本強(編)『日本の旧石器文化―総論編』所収、東京、七四―一三三頁。

BRAIDWOOD Robert J. (1967): "Prehistoric Men" (Seventh Edition), Chicago.

BREZILLON Michel N. (1968): "La dénomination des objets de pierre taillée. Matériaux pour un vocabulaire des

*préhistoriens de langue française*, (IV<sup>e</sup> supplément à

《GALLIA — PREHISTOIRE》, Paris.

BORDAZ Jacques (1970) : " *Tools of the Old and New*

*Stone Age*", Newton Abbot.

BORDES François (1980) : " Question de contemporanéité :

L'illusion des remontages ", " *Bulletin de la Société*

*Préhistorique Française*", tome 77, crsm no. 5, pp.132

— 133.

松藤和人 (一九八一) 「柳田 藤原論文に対するコメント」『旧石器  
考古学』32' 四〇頁。

MOVIUS Hallam L. Jr., Nicholas C. DAVID, Harvey M.

BRICKER, R. Berle CLAY (1968) : " *The Analysis of*

*Certain Major Classes of Upper Palaeolithic tools*",

( American School of Prehistoric Research, Peabody

Museum, Harvard University, Bulletin No 26), Cambri-

dge, Massachusetts.

モンテリウス (浜田耕作訳) (一九三二) 『考古学研究法』、東京。

柳田俊雄、藤原妃敏 (一九八一) 「瀬戸内技法と石刃技法—調整技術

のもつ意味—」『旧石器考古学』23' 二九—四〇頁。

山中一郎 (一九七五) 「旧石器時代の日本、(3) 生業 (石器製作技法に

ふれて)」藤岡謙二郎 (編) 『日本歴史地理総説』総論・先原

史編』所収、東京、八九—九三頁。

山中一郎 (一九七九) 「技術形態学と機能形態学」、『考古学ジャーナ

ル』167' 一三一—一五頁。

山中一郎 (一九八〇) 「石器研究の発想—竹岡俊樹「蓮光寺山第一地

点における石刃技法の分析」に触れて—」、『考古学基礎論』2、

一—一五頁。

ルロワール、グーラン、アンドレ (荒木享訳) (一九七三) 『身ぶりと言  
葉』、東京。

LEROI — GOURHAN André (1964) : " *Le geste et la parole,*

*technique et langage* " ( Sciences d'aujourd'hui collec—

tion dirigée par André GEORGE), Paris.

LEROI — GOURHAN André, Michel BREZILLON (1972) :

" *Fouilles de Pincevent. Essai d'analyse ethnographique*

*d'un habitat magdalénien* ", (VII<sup>e</sup> supplément à《GALLIA—

PREHISTOIRE》), Paris.